



## レビー小体型認知症サポートネットワーク福岡 第 21 回研修会・交流会



最も早い桜の開花が発表された 3 月。2021 年 3 月 18 日（木）に天神・BiVi 福岡 で、協力医 合馬慎二先生の司会のもと、DLBSN 福岡の第 21 回研修会・交流会を開催しました。新型コロナウイルスの感染対策として、参加者の皆様には前回同様、検温と入室時の手指消毒、マスクを着用しご参加いただきました。第 21 回を迎えた DLBSN 福岡を記念し、合馬先生から「これまでとこれから」の講演が行われました。8 名の参加があり、このうち初参加が 2 名でした。

### 「DLBSN 福岡のこれまでとこれから」

協力医である合馬慎二先生から、DLBSN 福岡のこれまでの歩みと今後の展望についてお話がありました。

DLBSN の目的は、必要な人が必要な時に必要な情報を得る場です。まだ十分に知られていない DLB について啓発するとともに、ご本人やご家族の経験や体験を話せる場でもあります。また、DLB の適切なケアに関する研修とご本人及びご家族、多職種（医師、看護師、介護職など）での交流と情報交換を行っています。

DLBSN 福岡は、2016 年 1 月に顧問医坪井義夫先生、代表下村順子さんを中心に福岡支部として発足しました。会員制ではなく、自由参加形式で 3 か月に 1 回、研修会と交流会を開催しています。

今後は継続していくことが大切で、栄養士や薬剤師といったより多くの職種の方にご参加頂き、多様な情報交換ができる場となればと思っています。新たな企画としては、1 年前に計画中であった日帰り旅行やオンラインの活用など考えていきたいと思っております、と締めくくられました。

## レクチャー「レビー小体病認知症の診断 これまでのLBSNの歩み」

顧問医である坪井先生から、レビー小体型認知症のレクチャーと、これまでの交流会で出てきた悩みについて話されました。最も多かった悩みは、「幻視」です。交流会のなかでは、様々な症状の一つとして、皮膚にまとわりつく、蜘蛛の糸のようなものが天井から垂れるといった「体感幻覚」、目が覚めると必ず誰かがいる、声が聞こえる、ガラス越しに人が立っているといった「夜間幻視」、顔が見えない誰かが入っている、話しかけるが黙っているといった「行動化」などが報告されました。幻視の対応として「否定をしない」がありますが、教科書通りの対応では対処できずケンカになってしまう、放っておいてよい場合もあるのではといった、事例ごとのアドバイスもありました。

次に多かった悩みは、「主治医との関係性」です。わかってもらえない症状をどう伝えるか、思ったことが言えない、医師を変えたい、相談するところがないといった悩みが語られ、専門職として体験者として、それぞれの立場から意見交換が行われました。

レビー小体病のケアで大切なことは、運動症状、精神症状、認知機能低下といった症状を理解することです。また、不安やうつ、悪夢、大きな寝言、頻尿、立ちくらみなどの症状も多いので、基本の療養と個々の問題症状への対応が必要です。

最後に、本会は自分たちが与える場ではなく、参加者それぞれ双方向の場であるとお話されました。

## グループワーク

顧問医、協力医を囲み、円になって、お一人ずつ自己紹介とご家族から現状や相談ごとについてお話して頂きました。ご家族の「幻視」の悩みに対するアドバイスを紹介します。

- 家の中だけで過ごすのではなく、デイサービスなどに行くと、普段の生活から離れることができ、デイサービスの活動など他のことに集中できるので、幻視が見えなくなる場合もある。
- 活動的な状態を維持できるよう、散歩など外出の機会を増やすとよい。

次回も新型コロナウイルス感染の状況によっては延期・中止や一部会の内容が変更になる可能性もありますのでご了承ください。また、ご参加の際には、マスクの着用、自宅での体温測定をお願い致します。

次回の研修会・交流会は、2021年6月3日（木）18時～

BiVi 福岡 6階会議室です。



報告者：DLBSN 福岡 副代表坂梨左織